岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

英語教材としての映画スクリプト(6)：固定化されたイディオムの柔軟性に関して

メタデータ	言語:
	出版者: 岐阜大学教育学部
	公開日: 2023-12-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 飯田, 泰弘
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000210

英語教材としての映画スクリプト（6）

－固定化されたイディオムの柔軟性に関して－

Movie Scripts for English Learning/Teaching Material (6)

－On Flexible Properties of Fixed Idioms－

飯田泰弘

IIDA Yasuhiro

［キーワード Keyword］　イディオム、映画英語、英語教育

［所　　属 Institution］　岐阜大学教育学部（Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　英語学習者が多く目にする表現のなかに、イディオムがある。効果的に使えるようになると、表現力もアップするイディオムであるが、さまざまな複雑な特性を持つことがわかっている。たとえば主なものに、(i)非合成性(non-compositionality)、(ii) transformational deficiency (Chafe 1968)、(iii)語彙的完全無欠性、といった3つを挙げることができる。(i)に関しては、イディオムを成す各英単語の意味の足し算ではイディオム全体の意味を導き出しづらく、(ii)に関しては、受動化などの統語操作をかけることができず、(iii)に関してはイディオムを形成している各語は、別の語と入れ替えをしてはいけない、という内容である。つまり、イディオムの中にはかなり固定化されているものがある。しかし、実際の映画や海外ドラマに出てくるイディオムを見てみると、異なる語を挿入したり、語句の入れ替えがあったりと、必ずしもこれらの特徴に沿わない実例も見つかる。とりわけ、文脈の助けを得られたり、発話状況が視覚的に分かりやすかったり、意図的にことば遊びをしたりするときは、固定化されたイディオムであっても、柔軟な変化を見せる。本稿では、映画や海外ドラマの実例を多角的に観察し、そのような興味深い実例から「ことばの柔軟性」を感じて味わい、日本の英語科教育で活用する方法を考える。

1.　はじめに

映画を教材として使用する利点は、（1）のようにいくつも挙げることができる（e.g., Edsawa, *et al.* 1989, 新田 1994, 角山 2008）。[1] その中でも本稿では、（1b, e, f）に焦点を当てることになる。

(1) 映画の利点

a.　学習者の関心を引きやすく、飽きにくい。
b.　文脈が分かりやすい。
c.　実際の英語の発音が確認できる。
d.　物理的距離が一目で把握できる。
e.　学校英文法のルールを逸脱するような、興味深い例が見れる。
f.　舞台設定に合わせた、特殊な英語が見られる。
g.　時代に沿った新しい表現が、どんどん反映される。

たとえば、意味解釈という点で考えると、同じtableという単語でも、（２）のような映画の実例を見ると、それぞれの状況において、異なる意味になることがわかる。つまり、（1b, e, f）といった観点から、映画の教材としての魅力を味わうことができる。

(2) a.　You were on the <u>table</u> for 11 hours.　（*Doctor Strange*, 2016）

[1] 本稿では、ドラマやアニメも含めて「映画」と呼ぶ。

b. As in “yes” to farm-to-table, “yes” to locally sourced, and “yes” to planet before profit.
（*Ant-Man and the Wasp*, 2016）

c. Anything short of that, deal’s off the table.　（*Salvation*, S(eason)2, E(pisode)11, 2018）

d. You ever waited tables?　（*The Passage*, E5, 2019）

e. They’ve been dealing under the table, and I’m gonna stop them.　（*Iron Man*, 2008）

（2a）は病院での会話であるので、tableは「診察台、手術台」という意味になり、（2b）のtableは「食卓」という意味になり、（2c）では「交渉の場」という意味になり、（2d）では「レストランなどのテーブル」という意味になる。また（2e）では、under the tableで「こそこそしたお金、賄賂」といった意味になる。つまり、その場その場で、tableの意味は臨機応変に使い分けが必要になるのである。

（1）の中の、同様の利点を活かした学びができるのが、イディオムである。まず「イディオム」という言葉は、教育現場で統一した使われ方がなされないケースがある。たとえば、（3）に挙げる表現に対しても、熟語、慣用表現、定型表現、決まり文句、などの言葉が使われている。

(3) a. 名詞句タイプ　：a piece of cake
b. 動詞句タイプ　：kick the bucket
c. 形容詞句タイプ　：hot under the collar
d. 前置詞句タイプ　：under the weather
e. 文タイプ　：the cat is out of the bag

（3）に挙げた表現の共通点のひとつは、それぞれが文字通りの意味（Literal Meaning）とイディオム的意味（Idiomatic Meaning）を持っている点である。たとえば、名詞タイプのa piece of a cakeの場合は、「ケーキ一切れ」と、「簡単なこと」というふたつの解釈をすることができる。本稿では（3）のようなイディオムを主に扱い、論を進める。イディオムという表現は、たとえば『ロングマン現代英英辞典』では次のような定義がなされている。

(4) a group of words that has a special meaning that is different from the ordinary meaning of each separate word. For example, ‘under the weather’ is an idiom meaning ‘ill’.　『ロングマン現代英英辞典』(2009)

ここでのポイントは、a group of wordsである。一単語のイディオムは存在しないため、イディオムとはおおむね、複数の単語が集まり、特別な意味を持つ表現のことを指すと言える。たとえば上の（4）にあるunder the weatherは、「体調が悪い」という意味を持つが、これはunderとtheとweatherという3単語のそれぞれの意味からは導き出せない。

ここまで見てきたのようなイディオムは、原則、自由な単語の入れ替えができない。Fraser（1970）の言い方を借りれば、（5）にある凍結度階層（frozenness hierarchy）の高いタイプと言える。[2]

(5) a. レベル5－再編成（Reconstitution）：blow the whistle on, keep one’s word, *etc.*
b. レベル4－取り出し（Extraction）：add up to, ask for, belong to, *etc.*
c. レベル3－置換（Permutation）：bring down the house, put down one’s foot, *etc.*
d. レベル2－挿入（Insertion）：bear witness to, do a good turn to, give chase to, *etc.*
e. レベル1－付加（Adjunction）：kick the bucket, care for (children), aspire to, repent of, *etc.*
f. レベルø －完全凍結（Completely Frozen）：bite off one’s tongue, bleed one white, beware of, *etc.*

[2] 日本語訳は小原（2014）を参考にした。

しかし実際には、文脈などの助けを借りたり、意図的にことば遊びをしたりするときには、イディオムの多くは、さまざまな変化を受け入れることがある。たとえば（6）にある映画の実例を見ると、（6a）の動詞句タイプのイディオムであるrain (like) cats and dogs「土砂降りになる」の中央部分に、場所を表す副詞句out thereが挿入されている。また（6b）の文タイプのイディオムのthe cat is out of the bag「秘密が漏れる」でも、中央に頻度を表す副詞のalreadyが介在している。

(6) a. It's raining out there, cats and dogs. (*Fantastic Beasts: The Crimes of Grindelwald*, 2018)
b. Well, since the cat's already out of the bag... yes, I will be wearing a necklace that Cartier has decided to loan me. (*Ocean's Eight*, 2018)

すなわち、ある程度は固定化されたイディオムであっても、状況によっては語句の入れ替えや、別の語句の挿入といった、柔軟な変化を見せるのである。そしてこのようなケースとして、ことば遊びやくだけた会話が多く見られる、映画内の会話が挙げられる。

これを踏まえて本稿では、固定化されたイディオムが柔軟性を見せる実例を、映画スクリプトの実例を通して観察し、英語教育に対してどのような学びを与えてくれるかを考える。具体的には、まず2節で、固定度（凍結度）の高いイディオムの特性に関して、先行研究で指摘されている３つの点を、映画の実例とともに確認する。次いで3節では、固定度の高いイディオムは、その性質を活かして言語学でどのような分析に用いられているかを、ふたつの言語現象から確認する。さらに4節では、固定度の高いイディオムが、柔軟な変化を受け入れている実例を映画の実例から取りあげ、英語教育にどのように活用できるかを考える。5節は本稿のまとめである。

2. イディオムの性質

上で見たように、本稿で扱うイディオムの定義は「特別な意味を生み出す、単語の集まり」と言うことができる。つまりイディオムは、英語の語彙力や文法規則の知識というよりも、特定の語が集まったまとまりが、イディオムとしてどのような意味になるかを知っているかどうか、が重要になる。そのため、（5）にある文タイプのイディオムでは、単語の並びのみを見ていても、文字通りの意味にしか解釈できず、各文の下にあるイディオム解釈を予測することは不可能である。[3]

(7) a. The chickens have come home to roost.
→'The effects of someone's actions have come back to him or her.'
b. The cat is out of the bag.
→'Secrets have been revealed.'
c. The fur flew.
→'There was a big fight.'
d. The shit hit the fan.
→'There was trouble.' (Larson 2010: 319)

また、固定化されたイディオムにおいては、内部の変化が許されないことが多い。たとえば、動詞句タイプのkick the bucket「死ぬ」というイディオムでは、冠詞を変化させた*kick a bucketや、名詞の単数・複数を変えた*kick the bucketsという形にするとは許されない。このような制限をまとめると、次のような3点に集約することができる。

[3] go bananasのように、文字通りの意味が得られにくいものもある。

(8) a.　イディオムの意味は、その成分の総和からは出てこない。
　　b.　統語上の変形を許さない。
　　c.　イディオム内の成分の語彙的代用はできない。

（8a）は、非合成性（non-compositionality）と呼ばれるもので、すでに見てきた性質である。kick the bucket「死ぬ」というイディオム解釈は、kickとtheとbucketという3つの構成要素の、各々の意味の足し算からは導き出すことは困難である。[4]（8b）は、Chafe (1968)がいうtransformational deficiencyのことである。たとえば、受動態である*The bucket was kicked by Sam.では、「死ぬ」のイディオム解釈は得られない。（8c）は、語彙的完全無欠性と呼ばれるもので、たとえばhave a crush on「〜に首ったけである」というイディオムは、似ている単語であっても、語を入れ替えた*have a smash onは、同じ意味を維持することはできない。これらの点を、さらに映画の実例で見てみたい。

2.1　非合成性について

（8a）で見た、イディオム解釈は各単語の意味の総和からは予測不可能、という性質が意味するのは、そのイディオムを知らない人には、文字通りの意味しか導き出せないということである。kick the bucketが出てくる、（9）の会話を見てみよう。

(9) Tom　：　Are you having fun? Gonna check this off the ol' bucket list, huh? Big night for you.
　　Sonic：　What's a bucket list?
　　Tom　：　A bucket list is, uh... It's a list of things you want to do in your life before you, well, kick the bucket.
　　Sonic：　I've never kicked a bucket, either! Oh, I gotta make my list.

（*Sonic the Hedgehog*, 2020）

ここでは、bucket listとは何かを教えている文脈で、kick the bucketが出ている。しかしこの映画では、Sonicは人間界にやってきたゲームのキャラクターなので、kick the bucketのイディオムとしての意味を分かっておらず、文字通り「バケツを蹴とばす」と理解したことが、最後の発言からわかる。つまりこれは、（8a）の非合成性を示しており、イディオムとしてのkick the bucketを知らない人には、「死ぬ」を表すとはわからないということである。

2.2　統語変形を許さない点について

次に、（8b）の特性に関して見てみたい。すなわち、Chafe (1968)がいうtransformational deficiencyのことだが、これをbreak a leg「頑張って、幸運を祈る」というイディオムで考えよう。下の（10）では、ショーの開演当日にgood luckという表現を使うのは不吉なので、break a legという表現を使おう、という文脈がある。ここでは最後に、I broke my leg.という変化形が登場する。

(10) Leo　：　I got it. Now I'll never say “good luck” on opening night. That's the rule, I'm no fool. What do I say, I beg?
　　All　：　What you say is “break a leg.”
　　Leo　：　Break a leg?
　　All　：　Yeah, break a leg! If you're clever.

---

[4] イディオムでは、なぜそのような意味を持つようになったかを説明する語源が示されることも多いが、あくまで諸説あるうちのひとつに過ぎないことも多い。イディオム解釈や、その語源を知ってから単語の連なりを見れば、その意味になることを納得することもあるが、やはり、全く背景知識を持たないまま、単語の連なりからイディオム解釈を導き出すことは難しい。

Max　:　Good luck!
All　:　You'll endeavor. To never, never, never, never ever, ever, ever say, on opening night.
Man　:　Five minutes to curtain. Curtain going up in five minutes.
Franz　:　Hasenpfeffer. I'm late. I must run.
All　:　Break a leg!
Franz　:　Kaiser!
Max　:　Franz, what happened?
Franz　:　I broke my leg.　(*The Producers*, 2005)

イディオムのbreak a legは通常、命令文のように用いられる。そのため、過去形になり、さらにaがmyになったI broke my leg.という文ではもはや、イディオム解釈が得られないことが（10）を見ればわかる。このシーンでは、大きな物音のあと、Franzが「足の骨を折ってしまった」という文字通りの意味で、仲間に状況を伝えている。

2.3　語彙的完全無欠性について

最後に（8c）で示した、イディオムを形成する単語の入れ替えはできない、という性質を見てみよう。すでに触れた通り、have a crush onというイディオムを、have a smash onとしてしまうと、元のイディオム解釈は失われてしまう。この点を、文タイプのイディオムであるThe shit hit the fun.「大問題になる」を使って、（11）のシーンで見てみよう。

(11) Lilly　:　We've been holed up in here waiting for the National Gurad since...
Tara　:　The shit hit the fan.
Lilly　:　Language.
Tara　:　Since the crap hit the fan.　(*The Walking Dead*, S4, E6, 2013)

最初のTaraの発言では、イディオムとして正しい語の連結を行っているものの、shitという下品な言葉を使ったことをLillyに注意されることになる。その結果、Taraは2回目の発言でThe crap hit the fan.と言い替えている。ここでは直前に「前フリ」があるため、その助けのおかげでthe capで始まる形にしても、言いたい内容は明確になっている。しかしこれはあくまでこの文脈があってのことで、本来は、文レベルのイディオムにおいて主語を別の語に変えることは許されない。そのため、仮に文脈がない状況では、The crap hit the fan.をThe shit hit the fan.のイディオムの意味で使うことはできない。

3. 言語学におけるイディオムの活用

前節で示した（8）の制限からわかるのは、ここまでみてきたイディオムはかなり固定化されており、そのイディオム解釈を維持するためには、語の入れ替えなどは許されないということである。このような特徴を前提として、固定化されたイディオムが英語学において、文構造の分析などに活用されることも少なくない。

たとえば、下に再掲する文タイプのイディオムを見てみよう。文タイプのイディオムは、主部と述部がひとつの「まとまり」となることで、イディオムの解釈を得ることができるものである。

(12) a.　The chickens have come home to roost.
　　→ 'The effects of someone's actions have come back to him or her.'
b.　The cat is out of the bag.
　　→ 'Secrets have been revealed.'
c.　The shit hit the fan.
　　→ 'There was trouble.'　(Larson 2010: 319)

これを踏まえて、「動詞＋NP＋to＋VP」の形を持つ、expectとpersuadeの振る舞いを見てみよう。このふたつの動詞の後ろに、文タイプのイディオムを入れると、（13）に示したexpectの場合は、文字通りの意味とイディオムの意味の両方を持つことができる一方で、（14）にあるpersuadeの場合は、文字通りの意味しか得られないことが報告されている。つまり、たとえば（13b）には「Homerは猫が袋から出ると思った」と「Homerは秘密がバレると思った」のふたつの解釈が可能であるが、（14b）には「Homerは猫に袋から出るように促した」という、文字通りの意味しか許されないのである。

（13）a.　Homer expected the chickens to come home to roost.
　　b.　Homer expected the cat to get out of the bag.
　　c.　Homer expected the shit to hit the fan.　　（Larson 2010: 320）
（14）a.　Homer persuaded the chickens to come home to roost.
　　b.　Homer persuaded the cat to get out of the bag.
　　c.　Homer persuaded the shit to hit the fan.　　（Larson 2010: 320）

この違いが意味するのは、expectの直後の位置は主語位置である一方で、persuadeの直後の位置は主語位置ではないため、主語と述部が分断されることで、文タイプのイディオム解釈が不可能になっているということである。

（15）a.　expect $\underbrace{\text{NP to VP}}_{\text{SENTENCE!}}$
　　b.　persuade $\underbrace{\text{NP to VP}}_{\text{NONSENTENCE!}}$　　（Larson 2010: 321）

このような分析を展開できるのは、イディオムはひとつのまとまりになっていなければならない、という特性を前提としているからである。

同様のことは、繰り上げ構文（Raising Construction）でも言われている。次の例を見てみよう。

（16）The cat seems to be out of the bag.

この文においては、主語であるthe catと述部が、seemによって分断されているように見える。しかし実際には、文字通りの意味に加えて、イディオムの意味も可能であり、すなわち「秘密がバレたようだ」の解釈ができる。この理由としては、the catはもともと不定詞節の主語位置に存在していたので、そこでイディオムとしてのまとまりを形成していたという考え方がある。

（17）a.　The cat seems to be out of the bag.
　　b.　_____ seems [the cat to be out of the bag] .

このような分析を可能にするのも、固定化されたイディオムは、ひとつのまとまりになっていなければならないという前提があるからである。

4. 映画の魅力に関して

ここまで見てきたイディオムのタイプは、かなり固定化がされており、勝手に変更を加えることができないことがわかる。一方で、映画の中で文脈の助けを得られたり、ことば遊びをしたりする場面では、柔軟に語句の入れ替えなどを受け入れることも確認できた。本節では、そのような固定化されたイディオムが、英

語学習者にどのような学びを与えてくれるかや、映画の英語教材としての魅力に関して考えたい。

4.1　cat is out of the bagのさまざまな実例

まず（18）の例を見てみよう。ここでは、cat is out of the bagというイディオムの直後に、No more secrets. という言葉が続いている。

(18) Cat's out of the bag, doctor. No more secrets.　（*Godzilla*, 2014）

イディオムは、そもそもその意味を知らなければ、目につく単語の意味からでは、全体の予想がしづらい特徴を持つ。そこを逆手にとれば、（18）のような文脈を提示して、学習者にイディオムの意味を考えさせれば、イディオムの性質を理解させる機会になると思われる。

イディオム表現の、前後の表現方法の学びも提供してくれるのが、（19）のような実例である。ここでは、cat is out of the bagに、withを主要部とした前置詞句が後続している。

(19)　I'm afraid the cat's out of the bag with our reporter friend.　（*Salvation*, S1, E12, 2017）

この前置詞句が表すのは、漏れた情報の発信源である。日本語においては、「〜から情報がもれた」のように後置詞「から」を使うのが普通と考えられるが、英語においてはwithを主要部とした前置詞句を後続させることができるという学びを与えてくれる。

さらに（20）では、cat is out of the bagを印象付けることに効果を発揮しそうな、同じイディオムのくり返しを耳にすることができ、反復練習にも活用できる実例である。

(20) Erin　: But my concern is, I feel like the cat is sort of already kind of out of the bag.
Abby　: I think what they're saying is the cat is out of the bag. They want us to put the cat back inside the bag.
Erin　: No, I know that's what they're saying. But I'm saying the cat's already out.
Abby　: I know. I know it's out. So it's hard to put the cat back in. It's not impossible.
Erin　: But that's why they have that saying.
Abby　: It's a nonsense saying.
Erin　: If the cat is outta the bag, you can't put it back in!
Abby　: I put a cat in a bag all the time.
Erin　: But once the cat is out of the bag, aren't you like, "The cat is out of the bag!"
Agent : We just want to shove that damn cat back in the bag.
Rorke : The cat has been out of the bag before, and yet, people lose interest and put it back in.
（*Ghostbusters*, 2016）

4.2　文字通りの意味とイディオムの意味

イディオムには、文字通りの意味とイディオムの意味のふたつが存在していることは、すでに見てきた。映画の中には、その両方の意味を掛け合わせたことば遊びをする例も少なくない。まず（21）は、猫のキャラクターに対して、秘密を打ち明けるシーンである。ここでは、「猫が飛び出してくる」と「秘密がバレる」を同時に掛け合わせて笑いを誘っている。

(21) Humpty Dumpty : It's a surprise party, and the surprise is on you.
Lady　: Looks like cat's out of the bag.　（*Puss in Boots*, 2011）

また（22）の形容詞タイプのイディオムでは、敵対する相手を丸焦げにして倒したあと、「襟の下が熱い」と「怒っている」を掛け合わせている。実際に、襟の下から炎が飛び出す様子を見ることができるのも、映画ならではである。

（22）Antoine got a little hot under the collar.　（*Batman*, 1989）

さらに（23）のシーンでは、悩みを抱える主人公に対して、「際どい人生を送る」という意味でlive on the edgeを述べながら、実際に崖っぷちで立っている様子が映像にでる。この発言をする登場人物は、神という立ち位置で、一瞬で周囲の景色を変えられるからこそ実現する、文字通りの意味とイディオム解釈の掛け合わせである。

（23）So how about it? Feel like living on the edge?　（*Evan Almighty*, 2007）

このように、あえて同時にふたつの意味を掛け合わせることで、ことば遊びをすることは映画では少なくない。とりわけ映画なら、（21）のように動物の登場人物を使ったり、（22）や（23）のように映像に写る周囲の状況と掛け合わせることが容易にできる。イディオムの文字通りの意味を理解するうえでは、このような実例を見ることは効果的だと思われる。

4.3　語彙的完全無欠性をやぶる例

最後に、(8)で見たイディオムの特徴のひとつである、語彙的完全無欠性のルールをやぶる例を見てみよう。このルールでは、イディオムを構成する語を、別の語に入れ替えることはできないはずだが、(24) ではa piece of cakeのcakeが、kelpと入れ替えられている。しかしこのシーンでは、イディオムの「簡単なこと」という意味が維持されている。

(24) Go on. It'll be a piece of kelp.　（*Finding Nemo*, 2003）

この映画は、魚が主人公であるアニメであり、水中の魚同士の会話が行われる。そのため、魚の世界では存在しないcakeをkelpと掛け合わせることば遊びをしているが、同じk音で始める単語を使い、かつ、魚にとって身近なkelpを使うことで、イディオムの意味を維持していることが考えられる。

4.4　まとめ

この節では、映画の中には、固定化されたイディオムに対して多角的な学びを与えてくれる実例が多い点を確認した。英語教材としての映画の利点を（25）のように考えたとき、本節で考察した実例は、（25b, e, f）といった点を特に示していると言える。

（25）映画の利点

a.　学習者の関心を引きやすく、飽きにくい。
b.　文脈が分かりやすい。
c.　実際の英語の発音が確認できる。
d.　物理的距離が一目で把握できる。
e.　学校英文法のルールを逸脱するような、興味深い例が見れる。
f.　舞台設定に合わせた、特殊な英語が見られる。
g.　時代に沿った新しい表現が、どんどん反映される。

5. おわりに

本稿では、凍結度が高く、固定化されたイディオムに関して、その特徴を確認したうえで、映画の中の実例を見ながら、英語学習者にどのような学びを与えてくれるかを考えた。具体的には、英語のイディオム解釈は、各語の足し算では全体の意味が予想できず、ある程度、固定化されていると言える一方で、実際の使用では、語の挿入や語の入れ替えを許すなど、柔軟さを見せる側面があることを指摘した。そのうえで、英語のイディオム表現に対して、映画の実例は、多種多様な実例を英語学習者に提示してくれる点をはじめ、多くの学びを与えてくれることを提示した。

下の（26）にあるように、大学入学試験など、多くの試験にイディオムが登場する事実がある。[5] それを鑑みると、イディオムを学ぶ手段は多いに越したことはない。

(26)　As the settlers moved west in the nineteenth century, they added many colorful new expressions to American English. These are now part of British English, too: for example, to face the music (to accept the unpleasant results of your actions), to kick the bucket (to die), and hot under the collar (angry).

（関西大学, 2020）

（19世紀に入植者が西に移ると、彼らは新たに多彩な表現をたくさんアメリカ英語にもたらした。これらは今では、イギリス英語の一部にもなっており、たとえば、face the music（自分の言動の結果を受け入れる）、kick the bucket（死ぬ）、そしてhot under the collar（怒る）だ）

参考文献

秋元実治（2014）『増補 文法化とイディオム化』ひつじ書房.

小原真子（2014）「英語のイディオムの語彙的な凍結度について」,『島根大学法文学部紀要　言語文化学科編』37: pp. 71-93.

角山照彦（2008）『映画を教材とした英語教育に関する研究』ふくろう出版.

新田晴彦（1994）『スクリーンプレイ学習法－シナリオのからくり、セリフの成り立ち』スクリーンプレイ.

Chafe, W. (1968) “Idiomaticity as an anomaly in the Chomskyan Paradigm,” *Foundations of Language* 4: 107-127.

Edsawa, Y., Takeuchi, O. & Nishizaki, K. (1989) “Use of Films in Listening Comprehension Practice,” *Language Laboratory* 26: 19-40.

Fraser, B. (1970) “Idioms within a Transformational Grammar,” *Foundations of Language* 6: 22-42.

Larson, K. R. (2009) *Grammar as Science*, The MIT Press.

辞書

『ロングマン現代英英辞典』［5訂版］(2009)Person Education.

映画・ドラマ

Bergeron, B., Jenson, V. & Letterman, R. (Directors). (2004). *Shark Tale* [Motion picture]. United States & France: DreamWorks Animation.

Burton, T. (Director). (1989). *Batman* [Motion picture]. United States: Warner Bros.

Derrickson, S. (Director/Writers). (2016). *Doctor Strange* [Motion picture]. United States: Marvel Studios.

Edwards, G. (Director). (2014). *Godzilla* [Motion picture]. United States & Japan: Warner Bros.

Feig, P. (Director). (2016). *Ghostbusters* [Motion picture]. United States: Columbia Pictures.

Gillard, S. (Director). (2018). *Celebration Day* [TV series episode]. *Salvation*, CBS Television Studios.

---

[5] 日本語訳は筆者による。

Favreau, J. (Director). (2008) *Iron Man* [Motion picture]. United States & Canada: Paramount Pictures.

Fowler, J. (Director). (2020) *Sonic the Hedgehog* [Motion picture]. United States: Paramount Pictures.

Miller, C. (Director). (2011). *Puss in Boots* [Motion picture]. United States: DreamWorks Animation.

Nachmanoff, J. (Director). (2019). *How You Gonna Outrun the End of the World?* [TV series episode]. T*he Passage*, United States: Scott Free Productions.

Prange, G. (Director). (2017). *The Wormwood Prophecy* [Television series episode]. *Salvation*, United States: CBS Television Studios.

Reed, P. (Director). (2016). *Ant-Man and the Wasp* [Motion picture]. United States & Canada: Marvel Studios.

Ross, G. (Director). (2018). *Ocean's Eigh*t [Motion picture]. United States: Warner Bros.

Uppendahl, M. (Director). (2013). *Live Bait* [Television series episode]. *The Walking Dead*, United States: American Movie Classics.

Shadyac, T. (Director). (2007). *Evan Almighty* [Motion picture]. United States: Universal Pictures.

Stanton, A. & Unkrich, L. (Directors). (2003). *Finding Nemo* [Motion picture]. United States: Pixar Animation Studios.

Stroman, S. (Director). (2005). *The Producers* [Motion picture]. United States: Universal Pictures.

Yates,D. (Director). (2018). *Fantastic Beasts: The Crimes of Grindelwald* [Motion picture]. United Kingdom & United States: Warner Bros.